

伊藤栄樹

検事総長の回想



検事総長の回想

朝日文庫

1992年1月15日 第1刷印刷
1992年2月1日 第1刷発行

著 者 伊藤 栄 樹

発 行 者 木 下 秀 男

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03 (3545) 0131 (代表)

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京0-1730

© Yasuko Ito 1988 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-260693-2

長の回想

伊藤栄樹

朝日文庫

本書は、一九八八年に朝日新聞社から刊行された『秋霜烈日——検事総長の回想』を改題したものである。

検事総長の回想・目次

まえがき 7

秋霜烈日

造船疑獄事件1 土光さんのこと 17

造船疑獄事件2 ひょうたんから駒 21

造船疑獄事件3 赤坂芸者 25

造船疑獄事件4 指揮権発動 29

造船疑獄事件5 検事総長の進退 33

武装ギャング団事件 一度だけのうそ 37

船上密室殺人事件 「死刑」求刑 41

海上保安庁汚職事件 汚職・会社犯罪専門検事 45

造船疑獄事件・補遺 昭和維新の歌 49

日興連汚職事件 斜めの議事堂 53

テール・ファイヤー事件 保険会社が保険金詐欺 57

警視庁防犯課汚職事件 警部補の自白 61

売春汚職事件 赤煉瓦へのガセネタ 65

東洋精糖事件 隠し預金口座 69

富山水道汚職事件 名乗れぬ再会 73

鮎川派選挙違反事件 鬼の目の涙 77

交通切符制度の創設 遅刻防止ルール 81

裁判所・検察庁の統廃合 庁舎は元豚小屋 85

「松本楼」放火事件 窓からのスナップ 89

日活ロマン・ポルノ事件 「わいせつ」の概念 93

トイレット・ペーパー事件 「勉強会」の威力 97

運転免許のこと 北海道での冒険 101

連続企業爆破事件1 確信犯の自白 105

連続企業爆破事件2 天皇特別列車爆破計画 109

ハイジャック事件 超法規的措置 113

ダグラス・グラマン事件 国会答弁 117

ロッキード事件 アリバイ崩し 121

捜査余話四題 証拠と鑑定、自白と記録 125

検察の限界1 国会議員と政党员 133

検察の限界2 おとぎ話 137

終章 がんと私 141

海外司法事情報告

北欧所見 147

西ドイツ連邦司法省訪問とその前後 163

刑事局長ジロラモ・タルタリオーネ氏 173

日本法務・検察代表団訪中記 181

あとがき 207

まえがき

三月二十四日、四十年勤めた役所を退官し、必要最小限度の挨拶回りをすませて、さああとは、生活の半分を病気の治療にあてるとして、残り半分は何をしようか、さしあたりこれといった考えもないといった中途半端な状態で、病院のベッドにひっくり返って、天井を眺めている。そういった「絶妙のタイミング」に、絶妙の人物が病院へ現れた。

私は、昭和二十八年に初めて官舎を頂戴した。東京・杉並区方南町の小さな木造一家建てである。すぐ近所に、後の最高検総務部長の中村哲夫さんの官舎もあり、かわいいお嬢さんが四人おられた。やがて、上のお嬢さんは、判事の千種君（法務省出向が長く、何かとお世話になった）と結婚され、いちばん下のお嬢さんは、朝日新聞の若手記者阿部純和記者と結婚された。同君は、私が東京地検次席検事の頃、司法記者クラブに詰めており、親交を深めることになった。絶妙のタイミングで現れたのは、今や社会部次長、司法記者クラブの朝日新聞キャップとなった同君であった。

過去四十年間の回想のようなものを新聞朝刊連載三十回くらいにまとめて書けという。しばらく目をつむって、振り返ってみる。東京での検事一年生、横浜での二年生、それぞれに私にとっては珍しい「強力犯^{ごうりきはん}」の思い出がある。また、横浜時代には、知能犯専門検事への

第一步を踏み出した海上保安庁汚職事件がある。七年間の特捜検事時代には、造船疑獄事件について五、六回は書くことがあろうし、その他一年に一件くらいの割合では、面白い事件を取り扱っているように思う。法務省刑事局の局付、参事官、刑事課長、総務課長時代には、交通切符を“発明”したり、区検察庁の統廃合に努めたりしたものだ。その後の人事課長時代には、仕事の性質上秘密事項が多く、書ける話題に乏しいが、会計課長時代なら、いくらか話題がありそうだ。その後は、東京地検次席検事、最高検検事、刑事局長、事務次官、次長検事、東京高検検事長、検事総長と累進していくことになるが、それぞれのポストについてひとつずつくらいのは話題は提供してくれるだろう。よし、不思議なご縁でこういうことになったからには、お引き受けすることにしようと思ひ、その旨お返事したのであった。

その結果、五月四日から朝日新聞朝刊に掲載された文章が、本書の第一部をなしている。第二部は、役人生活の間に、海外出張の際の印象を活字にしたものがあるので、この際収録させてもらった。妻へのはなむけのようなつもりである。役人を辞めたら、長年苦労ばかりかけてきた妻へのせめてもの罪ほろぼしに、外国旅行にでも引っぱり出そうと思っていたのが、私の病気でだめになってしまった。私の過去の旅行記では仕方がないが、せめてこれでも読んでくれたまえ。

新聞連載が実現し、本書が世に送られることになるについては、すでに記したような阿部

君のお骨折りがあったほか、その前任者高木敏行君、それに、執筆にあたって精力的に資料集めなどをして下さった沖浩記者にすっかりお世話になった。この際、お礼を申し上げておく。

昭和六十三年五月

伊藤栄樹

この原稿は伊藤氏が生前に執筆、家族に託していたものです。



昭和62年の長官会同の席で

検事総長の回想

秋霜烈日